

紀 要

第 21 号

2008. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

高島市今津町弘川B遺跡出土の縄文土器

—滋賀県域における縄文時代中期末の様相の理解にむけて—

小島 孝 修

1. はじめに

滋賀県域において、縄文時代の遺構・遺物がこれまでに見つかっている遺跡は、約400箇所を数える^①。しかし、この数には、数点の遺物が当時の遺構に伴わないで出土しただけの遺跡も多く含まれる。したがって、実際に研究の組上に載せられるような良好な遺構・遺物が検出されている遺跡となると、その数はかなり少なくなる。

また、県内には様々な事情により実測図などが公表されていない縄文時代の遺物が少なからず存在するが、当時の社会を理解するには、それらのうちの少しでも多くが公表される必要があると考える。それで、県内の未公表の縄文時代遺物について、機会あるごとに公表に努め、検討するための基礎的な情報の共有を目指してきた。

本稿で紹介する弘川B遺跡の縄文土器は、そういった未公表遺物の一つだが、後述するような遺跡の所在地とその属する時期・内容において、優先的に公表されるべきだと考える。今回、一部のみではあるが報告した上で、その位置付けについて若干の検討を行いたい。そして、滋賀県域の縄文時代について今後考えていく上での、重要な要素の一つとしてとらえていきたい。

2. 弘川B遺跡の調査・報告の概要

弘川B遺跡は、滋賀県北西部・湖西北部地域の高島市今津町弘川に所在する。石田川右岸の下位段丘・低位段丘に立地し、琵琶湖西岸まで約1.8kmの距離にある。縄文時代～古墳時代・平安時代の集落として周知されている^②。今津町は、高島市域で縄文時代遺跡が最も多く分布するが、弘川B遺跡が所在する弘川地区は、昨年報告書が刊行された後期前半の集落である弘川佃遺跡^③など、特に集中する地区と言える(図1)。そのほか、北東約2kmには晩期の大墓地群が検出された北仰西海道遺跡が位置する。

弘川B遺跡の発掘調査は、県営ほ場整備事業に伴い、滋賀県教育委員会を調査主体、当協会を調査機関として昭和54・55年(1979・1980年)度を実施し、調査報告書を刊行している^④。本稿で報告する縄文土器は、昭和55年の第Ⅱ次調査、第4区の第12トレンチ・第13・14トレンチ・第15～17トレンチにまたがって検出した溝1の埋土から出土した(図2～5、写真1～3)。そのほかの縄文時代の遺構としては、晩期後半の土器棺墓1基を第2区第16トレンチで検出している。

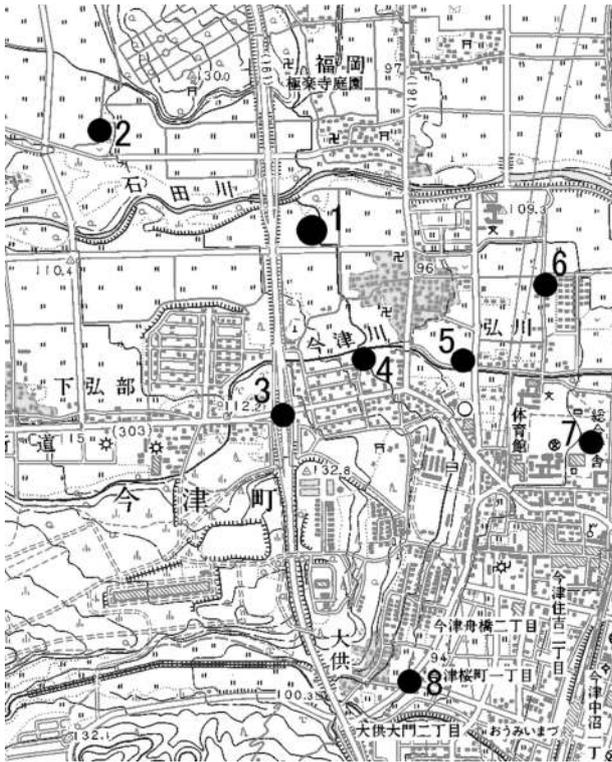
溝1について報告書では、「規模は、長さ55m以上、幅8～18.5m、深さは南西側が約30cm、北東側が約70cmを測り、南西から北東へ流れる自然流路と考えられる。溝内堆積土

は大きく上層・下層にわけられ、遺物は、第13・14トレンチの溝の西辺の下層及び底面から、縄文時代中期の土器、石斧等が集中して検出された。遺物はほとんど摩滅しておらず、近くに集落の存在が推定される。」と述べる。この記述から、人工的な溝ではなく自然流路であること、出土遺物には摩滅の少ない縄文時代中期のものがあることがわかる。ただし、そのほかの時期の遺物や埋没時期についての記述はない。また、図4から溝1は溝2の形成以前に埋没していたことがわかるが、溝2を「磨製石鎌と弥生式土器が底近くから出土しているが、弥生時代中期と思われる。」と時期比定している。よって、溝1の埋没時期は、弥生時代中期以前と判断される。

しかし、「弘川遺跡出土土器観察表」には「第15、16、18トレンチ溝1」出土遺物として土師器2点を挙げ(18は17の誤植?)、その実測図・写真を掲載する。すなわち、本文記述・遺構実測図と遺物観察表・遺物実測図の間に齟齬が生じている。したがって、溝1の埋没時期については現段階では保留とせざるを得ない。

溝1出土の縄文時代中期の遺物は、「整理途中のため概要のみを紹介し、後日詳細に報告する予定である。」とし(「3.調査の経緯」)、出土量についても「第4区の溝1より多量に出土した。」と記すのみで、具体的な数量は不明である。石器は5点(環状石斧未成品1点、磨製石斧1点、磨石類3点)の実測図・写真が掲載されているが(本稿写真8・9、図6)、縄文土器は写真図版で有文深鉢・浅鉢の口縁部20点23破片と底部9点の合計29点が示されるのみで(本稿写真4～7)、実測図はない。写真を見る限りでは、縄文時代中期末の所産であることがわかる。

この弘川B遺跡の縄文時代遺物は、「湖西北部地域の縄文時代中期末の比較的まとまった資料」という点で、非常に重要と考えられる。この時期の関西地方では、その前段階に比べて大幅に遺跡数が増加し、東日本から流入した文化によりその内容が一新され、早期後葉や晩期末と並ぶ縄文時代の大きな変革期として認識されている。滋賀県域でも、縄文時代中期末の遺構・遺物が検出された遺跡は湖北・湖東地域を中心に少なくないが、残存状態の良好な縄文土器がまとまって出土した遺跡となると、数が限られる。特に湖西北部地域では、弘川B遺跡以外に縄文時代中期末の遺物が比較的まとまって出土した遺跡はなく、当地域での該期のあり方を考える上で重要である。さらに、後述のように、隣接する福井県嶺南地域など、日本海側とのつながりを考える上でも無視することのできない遺跡と考える。



1. 弘川B遺跡 2. 心妙寺遺跡 3. 弘川A遺跡 4. 弘川下野遺跡
5. 弘川佃遺跡 6. 弘川友定遺跡 7. 弘川武末遺跡 8. 大伴遺跡
図1 弘川B遺跡及び周辺縄文時代遺跡分布図(S = 1:25,000)

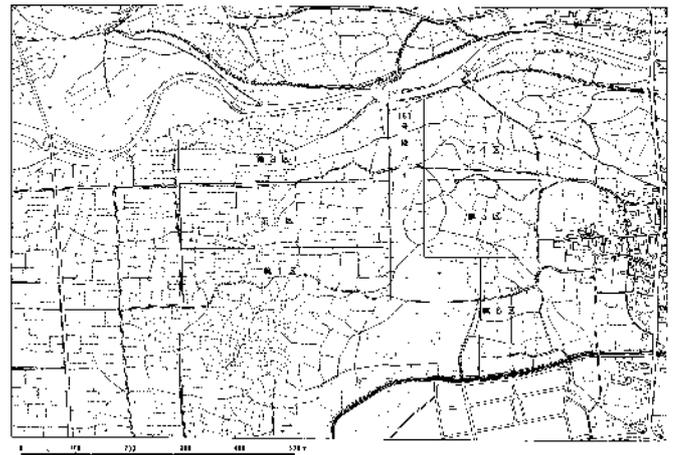


図2 「弘川遺跡地区割図」(報告書より転載、図3~6も同じ)

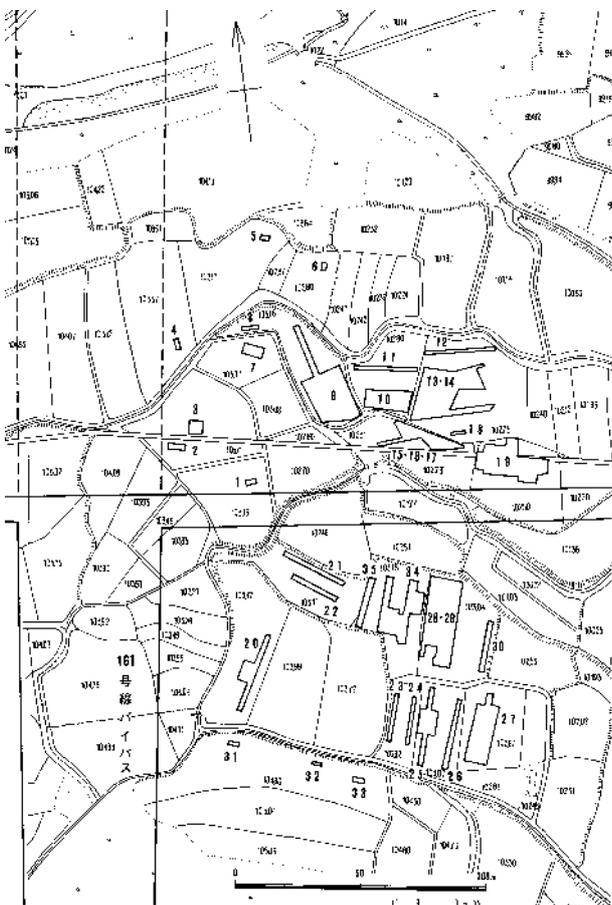


図3 「弘川B遺跡第Ⅱ次調査(第4・5区)トレンチ配置図」

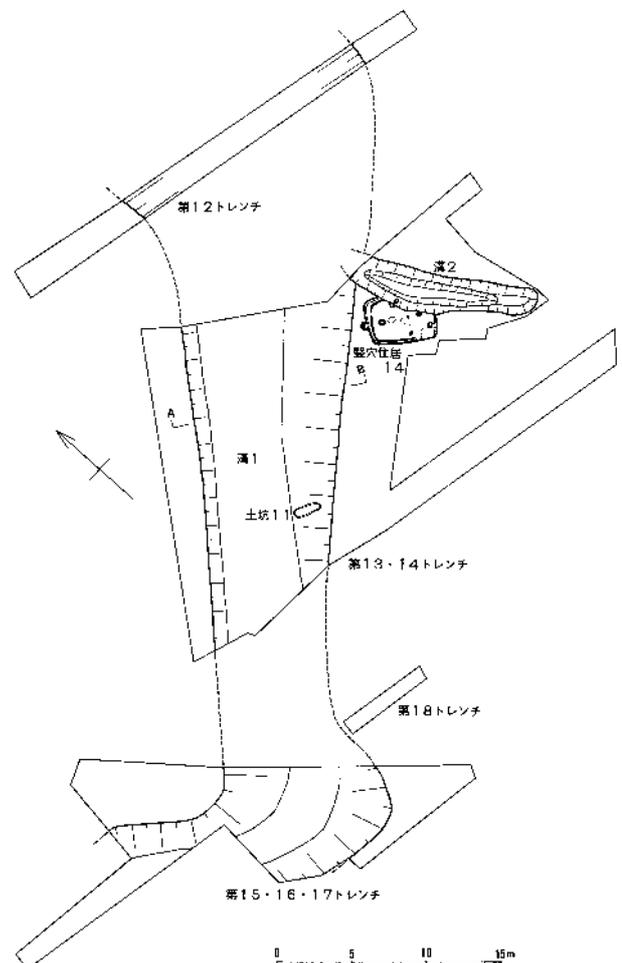


図4 「第12図~17トレンチ遺構実測図」

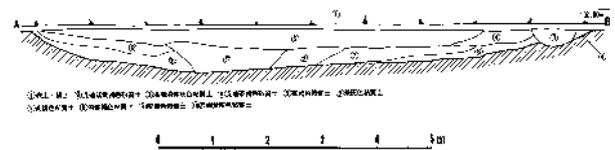


図5 「溝1土層図」

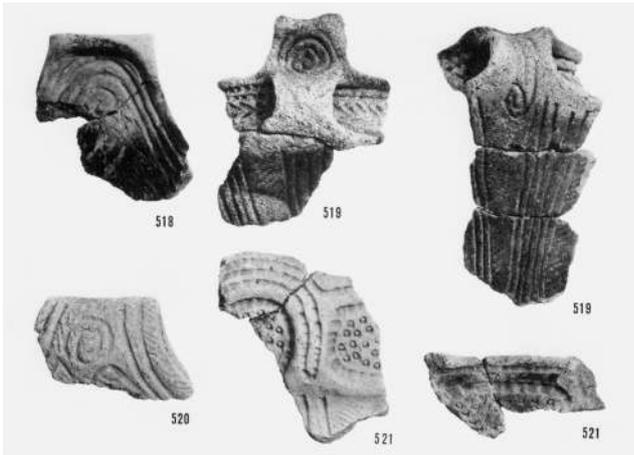


写真4 溝1出土縄文土器①

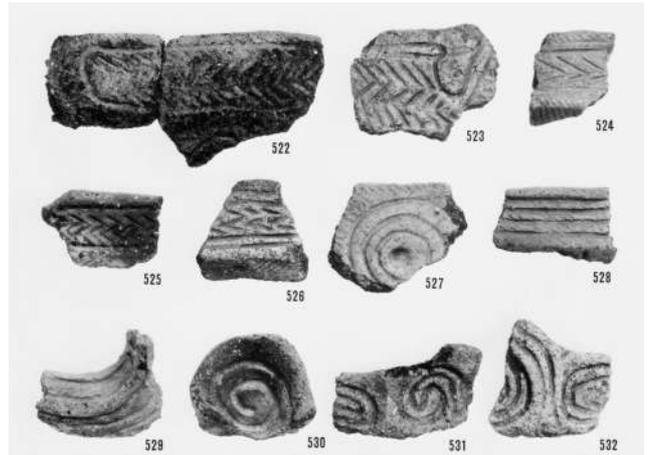


写真5 溝1出土縄文土器②

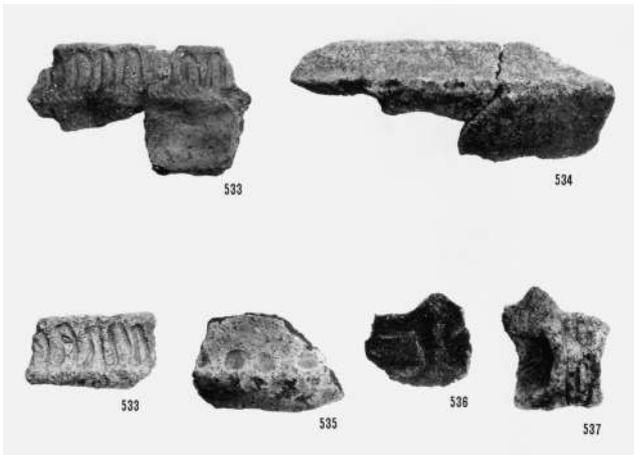


写真6 溝1出土縄文土器③

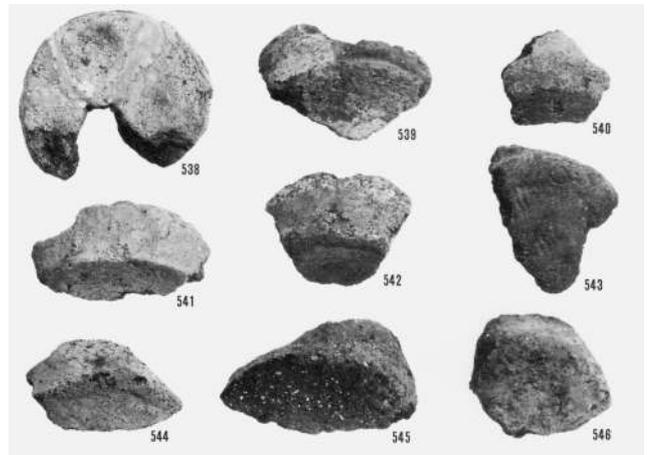


写真7 溝1出土縄文土器④

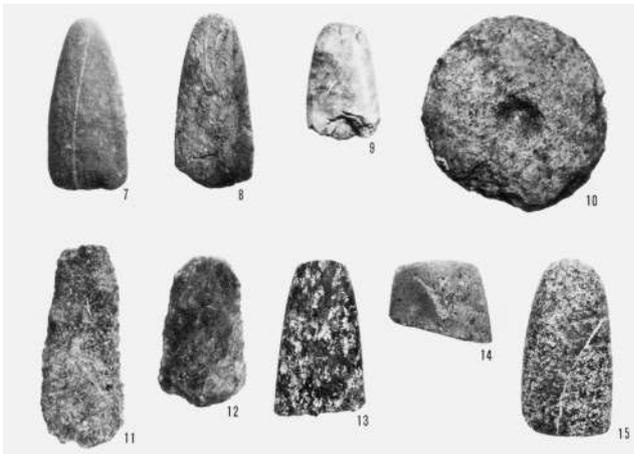


写真8 溝1出土石器① (10・13のみ)

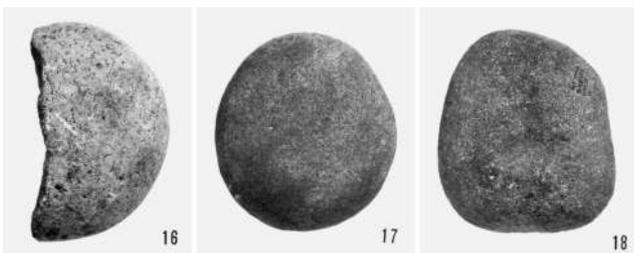


写真9 溝1出土石器②

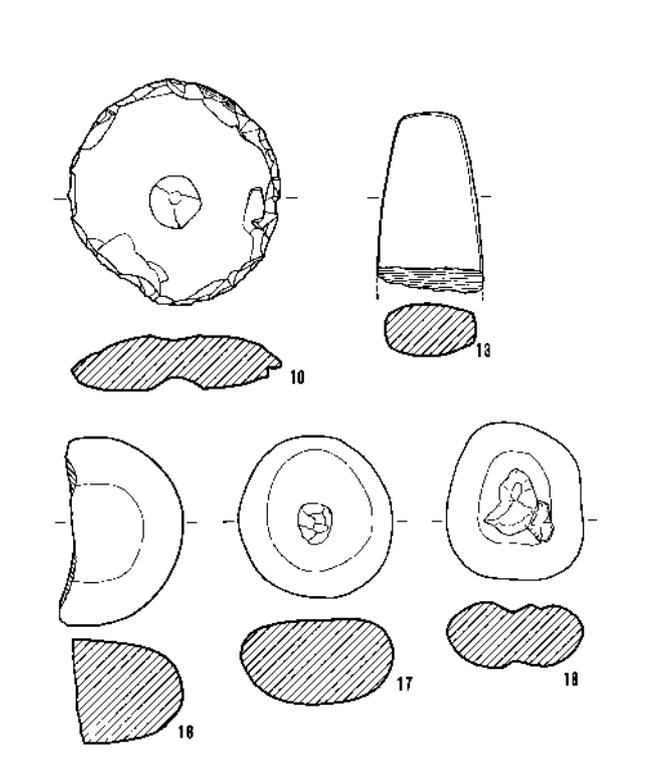


図6 溝1出土石器実測図 (S=1:4)

4. 図化した縄文土器の概要

実測対象としたのは14個体16破片で、いずれも有文深鉢の口縁部である(図7)。注記は7破片に認められた。4・5・7・12・13には「13T/溝9層」と書かれ、その後に4は「R-11」、5は「R-15」、7は「R-9」、12は「R-12」、13は「800803」とあった。「13T/溝9層」は、前述のように、第13トレンチで検出した溝の第9層から出土したことを示すと思われる。「R-」は、前述の図面資料『弘川遺跡』にもあったが、取上番号(あるいは袋番号)と思われる。13の「800803」は取上日である。そのほかでは、6は「T13・14/溝北側4層下/800726/R-24」、8は「北側3層/T12~14/大溝/800728/R-25」とあり、同じ溝の別の層から出土したと思われる。

以下、泉拓良氏による北白川C式の器形分類⁷⁾に従って、同型式を構成する主な器形である深鉢A類・同B類・同C類ごとに述べていくこととしたい。

深鉢A類(1~8) 深鉢A類は「口縁下にすぐ口縁部文様帯のくる、水平口縁もしくは主文様帯が波状を呈する」とされる。1・2は同一個体とも考えられるが、本稿ではひとまず別々に記述する。3は報告書写真図版の530であり、同様に4は528・531、5は523、6は525、7は524、8は526である。そのほか報告書写真図版の521は2と同一個体であり、532は4と同一個体と思われる。

1~6は波状口縁部である。1は波頂部下に隆帯と沈線で縦長の渦巻文を描き、その両脇には隆帯と押引沈線(部分的に2重になる)による区画内に竹管状工具による斜め下からの円形刺突を充填する。このほか、口縁と口縁端部に縄文を施す。体部文様では、垂下する2条の沈線の上端が認められる。これらの施文は同一工具によると思われる。2は円形の波頂部を隆帯で縁取り、4重の押引沈線による円形区画内に竹管状工具による円形刺突を充填する。円形区画の両端には、押引沈線による区画内に同様の刺突を施す。体部文様では、垂下する2条の沈線の上端が認められる。これらの施文は同一工具によると思われる。3は円形の波頂部を隆帯で縁取り、幅太の沈線で渦巻文を描く。渦巻文の外側と口縁内面の肥厚部上端に縄文を施す。4は波頂部下に2重沈線により渦巻文を描く。波底部には2重沈線を楕円状に描き、その周囲に縄文を施す。屈曲部下位には体部文様の垂下する沈線の上端が認められる。5は、波頂部は認められないが、口縁下の一部を肥厚させ、そこに縄文を施す。口縁下と肥厚部下に2重沈線を巡らせ、その下位には横位羽状沈線を充填しており、区画文になるとと思われる。6は波底部であり、押引沈線による長楕円を呈すると思われる区画内に横位羽状沈線を充填する。屈曲部に縄文を施す。7・8は平口縁部であるが、6とほぼ同じ文様構成をとる。すなわち、口縁下に2重沈線による、長楕円形を呈すると思われる区画内に横位羽状沈線を充填し、口縁と屈曲部下位の体部に縄文を施す。

深鉢B類(9・10) 深鉢B類は「口縁部から一段下がったところに隆帯で楕円形区画文を横に連ねた文様を施す」とされる。ここでは縦位の橋状把手を持つものをひとまず深鉢B類として報告する。

9は報告書写真図版の519であり、波頂部を含む2破片がある。口径約21.0cm、残存器高約18.0cmを測る。山形の波頂部は筒状を呈するが、筒の下端は閉じている。波頂部外面は沈線により渦巻文を描き、そこからその下位の橋状把手に向けて3条の沈線が垂下し、その下端は渦巻文となる。波底部には口縁下に2重の押引沈線による長楕円形区画文を描き、その中に横位羽状沈線を充填する。斜め上方に立ち上がる体部には、6条を1単位とする沈線を間隔を置いて垂下させ、その間に縄文帯を施す。10は報告書写真図版の537である。橋状把手が接続する部分の口縁が窪む波状口縁を呈し、橋状把手の両側には凹線による楕円形区画文を設け、その中に縄文を施す。口縁の外面と端部にも縄文を施す。

深鉢C類(11~14) 深鉢C類は「4~6個の突起状山形口縁をもつ、胴がきつくくびれた深鉢」とされる。報告する4点はいずれも口縁部で、11~13は突起部が残存する資料である。

11は口縁端部の屈曲の状態から筒状になる可能性がある。波頂部口縁下に指頭による押圧を2つ施し、その下位に2重沈線による渦巻文を施す。側面にかけては縦位に沈線文を描き、口縁と渦巻文周辺には縄文を施す。12は報告書写真図版の520である。外面は沈線による渦巻文や三角形の区画文などを描き、山形の側縁に沿って2重沈線を施す。肥厚した口縁端部は縄文を施し、側面にはさらに1条の沈線を施す。13は外面および口縁端部に地文として縄文を施し、3条を1単位とする平行沈線により外面に文様を描く。口縁端部は肥厚させて縄文を施し、側面にはさらに1条の沈線を施す。14は接合する2破片があった。口縁部文様帯に3~5条の平行沈線により三日月形を呈すると思われる区画文の中に刺突が充填される。体部文様帯には上端に渦巻沈線文を描き、その下位に4条1単位の沈線と縄文帯を縦位に交互に施す。

5. 資料の位置付け

(1) 縄文土器の型式学的な位置付け

本稿で紹介するのは以上だが、弘川B遺跡の縄文時代遺物については、前述のようにこのほかに滋賀県埋蔵文化財センターで保管されており、それらも早急な図化が望まれる。特に1・2や14は、同一個体と判断される破片が多数あり、これらの接合作業を実施することで、文様構成や器形などの重要な情報がより詳細に判明することになる。以下、これら未公表分を実見して得た情報や報告書写真図版に掲載されている土器も踏まえて、縄文土器の型式学的(時間的)位置付けを以下に考えてみたい。



写真1 「調査地遠景(北から)」(報告書より転載、写真2～9も同じ)



写真2 「調査地遠景(南から)」

写真3 「第13・14トレンチ
全景(東から)」

3. 今回の公表に到る経緯

以上のような弘川B遺跡の遺物については、1997年に湖西北部地域の縄文時代遺跡を集成する中で知り^⑥、その重要性についての認識を、集成した各遺跡とともに検討していく中で深めていった。

この遺物は、基本的に滋賀県埋蔵文化財センターが管理・収蔵しており、2000年頃に実見する機会を得た。このとき、遺物量が収納用コンテナ5箱程度であり、報告書写真図版に掲載されていた縄文土器の多くが不在であることが判明した。また、縄文土器各破片に施されていた注記には「13T/溝9層」あるいは「T-13・14/溝南西9層」とあるものが多く見受けられた。この「9層」が図5「溝1土層図」の「⑨灰褐色粘質土」に該当するかは現時点では断定できない。また、同一個体と認識される複数個体の多数の破片が、未接合の状態にあった。これら縄文土器の実測図の作成・公表の必要性をさらに感じたものの、その機会をなかなか得られなかった。

その後、滋賀県埋蔵文化財センターが所蔵する図面資料中に、『弘川遺跡』という標題のものを見出した。中には、番号「R-二」を付した縄文土器の拓影図と断面図が収納され、断面図の一部は製図済みであった。また、「T-9ピット及び土坑」から出土したとされる縄文土器の実測図(底

部3点)もあった。これは、報告書中にその記述はないものの、奈良時代の須恵器が出土した第9トレンチの土坑10とその西側で検出された柱穴を指すと思われる。

さらに、同僚であった故松沢 修氏から、縄文土器の拓本が多数収納されたファイル1冊を2004年に譲り受けた。これは近江風土記の丘資料館で開催された特別展『近江の縄文時代』^⑦のために集められた県内各地の縄文土器の拓影図であり、遺跡ごとに分けて収納されていた。このなかに、弘川B遺跡も含まれていた。

その後、高島市今津町東今津コミュニティセンターにおいて、滋賀県埋蔵文化財センター収納分に見当たらなかった縄文土器が常設展示されていることを、2005年6月に知った。これらには比較的良好な資料が多数含まれていたため、まずこれらを図化することが適当と考えた。

そこで、高島市教育委員会の葛原秀雄氏に連絡を取り、2005年8月23日に図化作業に及んだ。今回報告するのは、このときに図化した縄文土器である。図化に際しては、断面図は全ての破片について実施し、拓影図については図面資料『弘川遺跡』や故松沢氏によるものを今回掲載するにあたっては利用したが、採拓されていない部分が多数あったため、それらについても実施した。

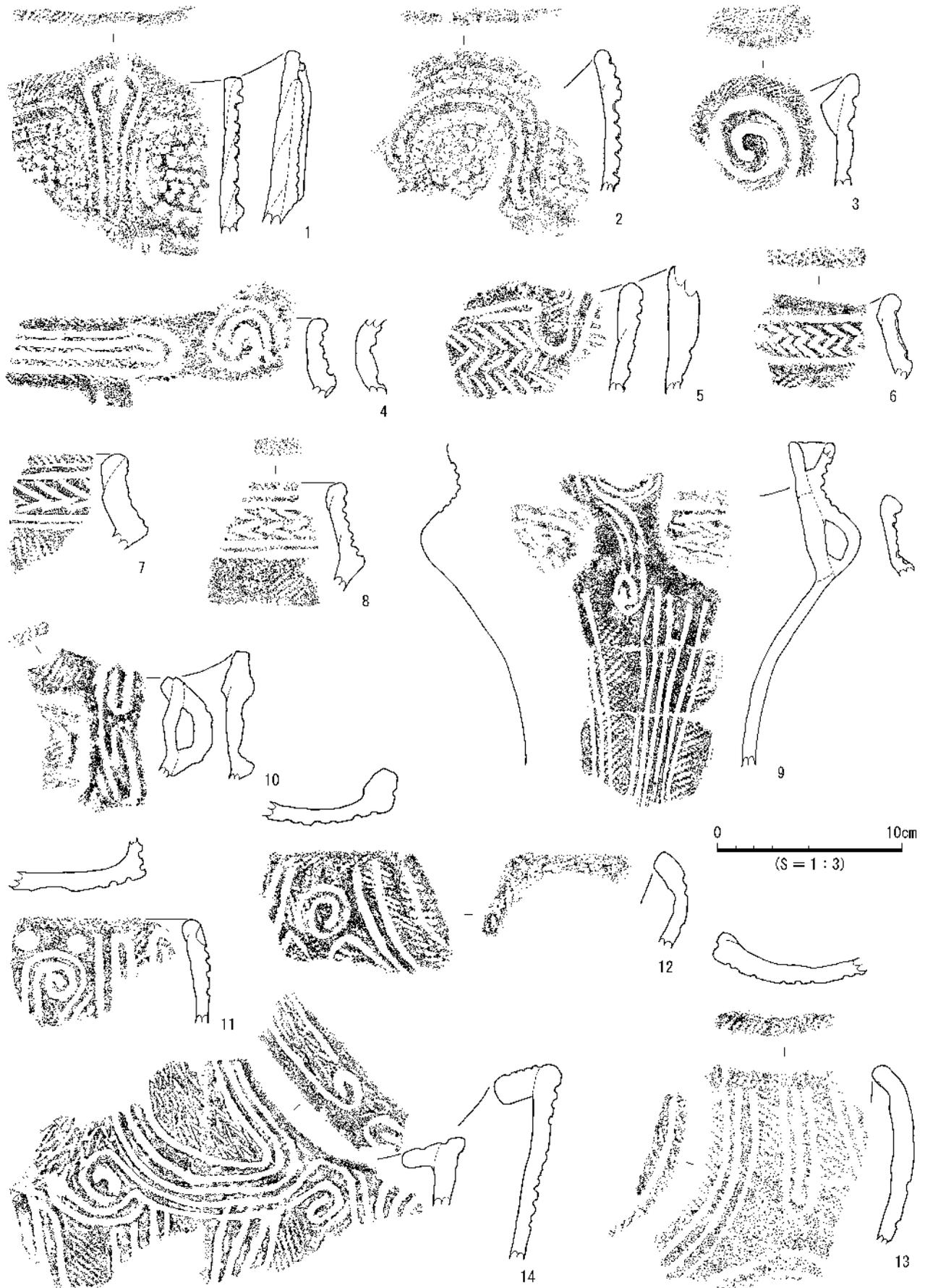


図7 弘川B遺跡出土縄文土器実測図

深鉢A類については、基本的に「口縁部と胴部を隆帯で区分する」A1類と思われる。口縁部の主文様は、円形区画を隆帯で取り囲む2と、沈線により渦巻文を描く3・4がある。主文様の両側に配置される区画内は、竹管状工具による円形刺突を充填する1・2と、区画に平行する沈線を描く4、横位羽状沈線を描く5～8がある。体部文様は、垂下する沈線群や縄文帯の上端のみが確認される。施文技法では隆帯・縄文や丸棒状工具を用いた沈線があり、1・2は押し沈線を多用する。このほか、報告書写真図版の522・527・532・533・536も深鉢A類であり、特に533は平口縁下に蛇行沈線を巡らせるA1類fである。

深鉢B類については、「楕円形区画文のつなぎ部が橋状把手」であることからすれば、9・10ともにB1類となるが、2点とも楕円形区画文が口縁直下に施文されていることからその定義からは外れており、厳密には深鉢B類とは言えない。さらに、9は筒状の山形口縁をも有することから、深鉢C類の要素を持つとも言える。楕円形区画文内には、9は横位羽状沈線を描き、10は縄文を施すが、9の文様構成は深鉢A類とした5～8にも共通する。体部文様は、9で垂下する沈線と縄文を交互に施す状況が認められる。施文は沈線・隆帯・縄文があり、9では押し沈線もある。

深鉢C類については、「口縁部文様が楕円形区画文を基調とする」C1類の11・14と、「口縁部に1本沈線を施す」C2類の12・13がある。施文は沈線と縄文のみであり、14は体部文様の構成が9と同様であることが確認できる。このほか、報告書写真図版では518・529も深鉢C類であり、特に518は本稿の14と同一個体であることを確認している。

浅鉢については、本稿掲載資料中にはないが、報告書写真図版の534・535が該当すると考えられる。ともに、ボウル形を呈する胴部に内傾する口縁部が屈曲して接続する器形であり、屈曲部上あるいは屈曲部よりも上位に、指頭によると思われる押圧を連ねる。

このほか、縄文のみを施す深鉢D類と無文の深鉢E類についても、少数確認している。以上から、北白川C式における基本的な器形は揃っていると考えられるが、深鉢A類・C類が多く、深鉢B類は比較的少ない。この傾向は、北陸地方西部や伊吹山地地域で認められ⁸⁾、筆者が調査を担当した、琵琶湖東岸に位置する安土町竜ヶ崎A遺跡⁹⁾でも、同様の状況を確認している。弘川B遺跡出土資料でも、その傾向を追認することができた。

さて、これらの時期的な位置付けだが、深鉢A類で口縁部文様帯の簡略化の傾向や区画文内に横位羽状沈線を描く点、深鉢B類とした個体で橋状把手が器面に接しない点、体部文様は沈線や縄文が縦位に展開して紡錘文や磨消縄文帯などを持たない点などから、北白川C式中頃として大まかにとらえておきたい。自然流路の埋土から出土した遺物ではあるものの、時期的には比較的まとまっていると考えられる。報告書の記述にもあるが、近接地点で営まれた

集落に由来する遺物が比較的短期間で埋没したと考えられる。ただし、石器は未公表資料中にもほとんどなく、この少なさは弘川B遺跡の特徴と言えるかもしれない。

(2) 弘川B遺跡の滋賀県内での位置付け

続いて、弘川B遺跡の空間的な位置付けについて考えてみたい。前述のように、滋賀県域で縄文時代中期末(北白川C式並行期)の遺構・遺物が検出された遺跡数は、その前段階の中期中葉・後葉(船元IV式・里木II式期)に比べて格段に増加する。しかし、それらのうち、遺構群やまとまった量の遺物が検出された遺跡となると、数える程度であり、長浜市(旧浅井町)醍醐B遺跡や米原市(旧伊吹町)起し又遺跡、同(旧山東町)番の面遺跡、彦根市下岡部遺跡、東近江市(旧能登川町)林・石田遺跡、安土町上出A遺跡、竜ヶ崎A遺跡、守山市塚之越遺跡、栗東市霊仙寺遺跡などがある。いずれも滋賀県東部に分布し、いわゆる湖南地域や湖西地域には少ない。これらのうち、弘川B遺跡の今回報告した縄文土器と同時期に限定すると、その数はさらに減少することとなる。

以上のうち、弘川B遺跡と地理的に比較的近いのは、直線距離で東方30km前後に位置する、湖北地方の醍醐B遺跡や起し又遺跡である。これらは伊吹山系に立地して、弘川B遺跡との間には琵琶湖が横たわり、湖岸から10km以上離れている。筆者の問題意識として、琵琶湖を中心とした中地域的な土器分布圏における社会構造の解明を基本的に念頭に置いてはいる。しかし、隣接する各地域からの影響が認められる小地域的な土器分布圏をも考える上では、湖上交通が当時は頻繁に用いられたと想定されてはいるものの、両者間には少し距離を感じる。縄文土器について言えば、具体的な型式学的な比較・検討を行っていない現時点で感覚による発言は控えなければならないが、岐阜県美濃地方と接している伊吹山系と、琵琶湖西岸に位置する弘川B遺跡では、縄文土器にも異なる要素が散見される。

(3) 弘川B遺跡と福井県嶺南地域との関連性(図8・9)

以上のような地理的状況から、弘川B遺跡の位置付けを検討する上では、滋賀県内だけではなく、隣接する福井県西部の嶺南地域の状況を確認することが必要と考える。古代の若狭国の範囲と敦賀市域からなる嶺南地域は、滋賀県の北西側に位置し、日本海に面する。高島市今津町からは湖北地方と同程度の距離に地続きで位置しており、縄文時代中期末～後期初頭の遺跡が多数存在する。両地域の該期の状況を検討するためには、遺構とともに遺物、特に最もその地域の特徴が現れやすい縄文土器について型式学的に比較検討することも有効である。しかし、今回は弘川B遺跡出土土器のごく一部を紹介したに過ぎないことや、嶺南地域の資料の公表がまだ充分になされていないという現状がある。よって、それらについては今後公表資料が充実した時点で検討する課題とし、その前段階として本稿では嶺南地域の遺跡の立地などを概観しておきたい。

まず、地形についてみてみれば、嶺南地域を特徴付けるのは、若狭湾を取り巻く典型的なリアス式海岸である。さらに、山地が海岸線付近まで迫るため、河川の沖積により形成された平野部はおよそ狭い。高島市との境には、標高900m前後の山々が連なる野坂山地がある。今津町と若狭地域の中心都市である小浜市を結ぶ道は、今津町から分水嶺となる水坂峠を越えて県境に到る。近世は若狭街道と呼ばれていたが、中世の文書にもこの道は記されており、その由来は古代にまで遡ると考えられている。今津町と小浜市の間は直線距離で約27kmを測るが、若狭街道は「九里半街道」と呼ばれていたように、その道のりは約38kmである。現在では国道303号線が両地を結び、路線バスが走る。

また、敦賀市は今津町のほぼ北に位置する。両地を結ぶ道は、古代は北陸道、近世では西近江路と呼ばれ、現在では国道161号線がそのルートにほぼ重なる。直線距離では約26kmとほぼ小浜市と同じだが、古代に愛発関（あらちのせき）が国境に置かれたこの経路は比較的険しい。これらの街道の由来が縄文時代まで遡る確証は現時点ではないが、その可能性は想定され、両地域のつながりは十分に検討されるべきと考えられる。

嶺南地域の縄文時代の状況については、調査事例があまり多くないことや未公表資料が少なくないことから不明な点も多いが、代表的な存在として若狭町（旧三方町）鳥浜貝塚の前期の調査成果が挙げられる。しかし、中期末の遺跡も少なくない。少し前のデータになるが、若狭地方で確認されている約30ヶ所の縄文時代遺跡のうち、17遺跡から中期末～後期初頭の遺物が出土しており、前期と比較して約3倍になる。さらに、後期前葉以降の遺跡数は極めて少ないというが、これは、中期末～後期初頭に連続して集落が営まれることが多いことと併せて興味深い現象といえる⁹⁰。一方で、近年は若狭町（旧三方町）の北寺遺跡⁹¹やユリ遺跡で縄文時代後期前葉以降の良好な遺構・遺物が多数検出され、資料は増加しつつある。



図8 若狭地方縄文時代中期末～後期初頭遺跡分布図
(福井県立若狭歴史民俗資料館1993より転載)

縄文時代中期末～後期初頭の遺跡が特に集中するのは、鳥浜貝塚を含む三方五湖周辺である。その南側に広がる鯉川（はずがわ）流域の沖積低地には、縄文時代には湖が広がっていたとされているが、8遺跡が分布する。前述の北寺遺跡は、近年2冊目の発掘調査報告書が刊行されたが、縄文時代中期初頭～後期後葉の良好な遺構・遺物が検出され、中期末はその中心となる時期の1つである。そのほかの遺跡のほとんどは日本海岸部の砂丘に立地する。良好な遺構・遺物が検出された遺跡として、小浜市阿納塩浜遺跡⁹²や高浜町立石遺跡⁹³が挙げられる。

これら、湖岸・海岸部に集中する嶺南地域のあり方は、滋賀県域における縄文時代遺跡中期末の遺跡が、琵琶湖岸に限定されないで扇状地や丘陵部にも広く展開することと対照的にみえる。このような中、弘川B遺跡と同じ段丘上に立地する、おおい町（旧名田庄村）岩の鼻遺跡に注目し、調査成果を以下に簡単に見ておきたい⁹⁴。

岩の鼻遺跡は小浜市南西部に接する三重地区に位置し、南川左岸の標高51m前後の河岸段丘上に立地する。河川改修工事に伴って昭和60・61年度に8,400㎡の発掘調査が実施され、それらの成果は2冊の概要報告書として公表されている。縄文時代早期前葉の住居跡が検出されるなどの成果が比較的注目されるが、縄文時代中期末～後期初頭についても、豊富な遺構・遺物が検出されている。

遺構については、炉跡のほか土坑や埋設土器・集石などが検出されており、このうち炉跡は竪穴住居の存在を想定させる。遺物のうちの縄文土器については、実測図が公表されていないため写真図版での判断となるが、縄文時代後期初頭に比定されるものは比較的少ないようで、主体は縄文時代中期末である。隆帯を多用して口縁部文様を描くもののほか、沈線内に刺突を施したり体部に沈線による紡錘文を描いたりするものがあり、縄文時代中期末の中でも若干の時期幅（型式差）があると思われる。



図9 滋賀県北部・福井県嶺南の代表的縄文時代中期末遺跡
1. 弘川B遺跡 2. 醍醐B遺跡 3. 起し又遺跡 4. 鳥浜貝塚・北寺遺跡・ユリ遺跡 5. 阿納塩浜遺跡 6. 立石遺跡 7. 岩の鼻遺跡

石器も遺物包含層などから多数出土している。出土状況からその帰属時期は幅を持たせる必要があるが、縄文土器の出土比率からして、その多くが縄文時代中期末と考えられるという。特に注目されるのは、166点の石錘である。このうち、小判型円礫を用いた切目石錘は125点を数え、この多さは醍醐B遺跡や木ノ本町古橋遺跡など、滋賀県湖北地域の伊吹山系に類似例があって興味深い⁸⁾。

これら岩の鼻遺跡のあり方を弘川B遺跡と単純に比較することはもちろんできないが、隣接地域における立地が似通った同時期の遺跡として、留意すべきと考えられる。このように、今後、滋賀県全体の該期の様相を検討する上では、従来あまり省みられなかった福井県嶺南地域との関連性を、より重視すべきと考える。

6. おわりに

本稿では、滋賀県北西部に位置する弘川B遺跡の縄文時代中期末の縄文土器の一部を紹介し、型式学的に若干の検討を行い、時期的な位置付けについて考えた。その後、弘川B遺跡の空間的位置付けについて、滋賀県域での地域性について述べ、さらに福井県嶺南地域との関連性について、今後の検討のために、その地勢や遺跡の立地などを概観した。嶺南地域の概要については、浅学のためその理解に誤解が生じている部分もあると思われる。その点についてはご寛恕願うとともに、ご指摘頂ければ幸いである。

筆者が常に持つ検討課題の1つとして、「関西地方および滋賀県域における縄文時代中期末（～後期初頭）という変革期の社会構造の解明」がある。本稿のような未公表遺物の公開は、その目的という家屋建築に向けて積み上げていく、基礎資料というレンガの1つである。土台はより堅固な方がいいから、レンガの数は多い方がいい。しかし、いつまでたっても家が建たないのでは、レンガを積み上げていく意味も不鮮明になっていってしまう。

現時点で未公表となっている、滋賀県域の縄文時代中期末～後期初頭の良好な資料としては、弘川B遺跡以外に栗東市霊仙寺遺跡の昭和60年度調査⁹⁾のものがある。今後は、これら2遺跡の残る遺物の公表に努め、レンガ積みをはじめとせず終わることとし、前述の検討課題に取り組んでいきたい。その際には、今回の福井県嶺南地域だけでなく、岐阜県西濃地域や三重県域・京都府域など、隣接する各地域との関連性にも十分に留意していきたいと考えている。

本稿の執筆にあたりましては、資料の見学に際して、高島市教育委員会文化財課葛原秀雄氏に大変お世話になりました。また、福井県嶺南地域の縄文時代中期末～後期初頭の概要のご教示とそれに伴う文献資料収集に際して、福井県立埋蔵文化財センター早瀬亮介氏に大変お世話になりました。文末ではありますが感謝いたします。

(こじま たかのぶ：企画調査課 主任技師)

註

- (1) 拙稿「近江における縄文社会の展開に関する覚え書き ―遺跡集成補遺編1―」『紀要』第18号 財団法人滋賀県文化財保護協会 2005
- (2) 滋賀県教育委員会『平成13年度 滋賀県遺跡地図』2002
- (3) 堀 真人ほか『弘川佃遺跡・弘川宮ノ下遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2007
- (4) 山口順子・兼康保明「第4章 高島郡今津町弘川遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅷ-3』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1981
当時の報告書の段階ではまだ「弘川B遺跡」ではない。
- (5) 拙稿「近江における縄文社会の展開に関する覚え書き ―地域の検討4. 湖西北部地域―」『紀要』第12号 財団法人滋賀県文化財保護協会 1999
- (6) 滋賀県立近江風土記の丘資料館『近江の縄文時代』1984
- (7) 泉 拓良「中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告―北白川追分町縄文遺跡の調査―』京都大学埋蔵文化財研究センター 1985
- (8) 富井 眞「北白川追分町遺跡出土の縄文土器―北白川C式の成立を考える―」『京都大学構内遺跡調査研究年報1994年度』京都大学埋蔵文化財研究センター 1998
- (9) 拙稿『竜ヶ崎A遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2007
- (10) 福井県立若狭歴史民俗資料館『若狭の古代遺跡―発掘の成果と出土品―』1993
なお、敦賀市域では、縄文時代遺跡がほとんど発見されていないことから、ここでの検討からはひとまず省いておく。
- (11) 小島秀彰『三方町文化財調査報告書第17集 町内遺跡調査 北寺遺跡Ⅱ発掘調査報告書』三方町教育委員会 2005
- (12) 若狭考古学研究会『阿納塩浜遺跡』小浜市教育委員会 1972
大森 宏・網谷克彦ほか『阿納塩浜遺跡調査概報―昭和57年度―』小浜市教育委員会 1983
森川昌和「第1章 原始・古代 第1節 縄文・弥生文化」『小浜市史』小浜市史編纂委員会 1992
- (13) 麻柄一志「50. 立石遺跡」『福井県史 資料編13 考古』1986
高浜町『高浜町誌』1985
- (14) 網谷克彦『岩の鼻遺跡Ⅱ―1986年度調査概報―』福井県立若狭歴史民俗資料館 1987
- (15) ただし、古橋遺跡の主体となる時期は、縄文時代中期中葉（船元Ⅳ式・里木Ⅱ式）であり、岩の鼻遺跡とは異なる。
- (16) 財団法人栗東市文化体育振興事業団『栗東市埋蔵文化財発掘調査 1985年度年報』栗東市教育委員会 2001

編集後記

前号の紀要より表紙デザインの刷新をはかりました。書架に並ぶことを想定し、各号ごとにテーマカラーを定めて発刊を重ねていきたいと思えます。

本書が文化財の保護のため、広く活用されることを心より願っております。

(編集担当 M. N.)

平成20年（2008年）3月

紀 要 第21号

編集・発行 財団法人滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

Tel. 077-548-9780(代)

<http://www.shiga-bunkazai.jp/>

E-mail: mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本 三星商事印刷株式会社